

あなたのお子さんが、家の前でアリの行列をじーっと見続けている。10分経ち、20分経ち、お子さんはずっとアリの行列を見続けている。日も暮れはじめ、もうすぐ夕飯の時間。この時、親のあなたはどうしますか？



どんな声をかけますか

上記のような状況で、多くの方は「もうすぐ晩ご飯やから、家入って。」と声をかけるのではないのでしょうか。もしくは、「何を見ているの？」と声をかけ、子どもが何をみて何を考えているかを聞く方もいるかもしれません。

では、このような場面で、「何も声をかけずに、子どもが家に入ってくるまで待つ」と考える方はいましたか？



子どもの頭の中

例えば、アリの行列を見続けている子どもは、どんなことを考えながら見ているのでしょうか。アリー匹一匹の体の動きなのか、隊形の美しさなのか、運んでいるものか、何かの規則性なのか、アリの気持ちを考えているのか…まったく何も考えずに無心で見続けている子は少ないのではないのでしょうか。大人が外から見ると「単なるアリの行列」でも、子どもの目を通すと「発見のアリの行列」なのではないのでしょうか。

時間に追われる毎日の中、大人は子どもを大人の時間枠にはめがちです。しかし、私たちが子どものころを思い出すと、大人になった今とは違う時間の流れの中で毎日を過ごしていたのではないのでしょうか。

夢中になる原体験

「原体験」という言葉をご存じでしょうか。精選版 日本国語大辞典では、「その人の人格形成や、行動の方向づけに、知らず知らず影響を及ぼしている、幼少期の体験。」と示されています。主に幼少期に五感（触覚・嗅覚・味覚・視覚・聴覚）を通じて得た、その後の人生観、価値観、行動の軸（＝生きる力）を形作る直接体験のことです。自然とのふれあい、感動、恐怖などの感覚が記憶に残り、大人になってからの判断基準にも影響を及ぼす「ルーツ」となる経験を指します。

都市化やデジタル化により直接体験の機会が減り、意図的に機会を作らないと体験しにくくなっている現代社会において、「原体験」が注目され始めています。



◆原体験が必要な理由とは・・・

実物に触れながら実際に行う“直接体験”は、いつの時代でも子どもだけでなく、大人にとっても大変重要なものです。特に、子どもの頃に行う“直接体験”は、知恵となり「生きる力」となって普段の生活に生かされます。今まで教育としてではなく、子どもの自主的な活動や遊びとして行われてきた原体験ですが、自然とのふれあい機会の減少などともなっており、都市部・農村部に関係なく減ってきています。

現在の子どもは、学校の教科書からの知識、テレビやインターネットからの情報など“間接体験”による知識はとてよく身につけていますが、“直接体験”は、絶対的に不足しています。そのため触ったり、嗅いだり、味わったりする活動をともなう“直接体験”（原体験）が現代の子どもに特に必要なことなのです。

◆原体験のすすめ方

原体験は、自然物を素材とする体験です。人工的な施設より、土があり、雑草が生え、いろいろな生き物の住む自然の場所が適しています。多くのことを教えるのではなく、その場所で子どもたちが自らの興味・関心によって、五感（五官）を通し、直接自然物を体験することに意味があります。気軽に出かけ、自然物を食べ、嗅ぎ、触れるといったことを、遊びを通して体験することが原体験の基本です。

指導者は、一つひとつの知識を教えるのではなく、子どもの興味・関心をふくらませるような指導が大切なのです。子どもが旺盛な好奇心をもっていれば、特別な指導は必要ありません。原体験をするには、過保護、過干渉を避け、多少の危険はともなっても子どもたちの自由な行動を見守ることが大切なのです。

「自然はぼくらの宝物」 (社) 全国子ども会連合会 より

親の我慢と覚悟



先ほどの夕飯前にアリの行列を見続けていた子が、「そろそろやめなさい」と言われてやめるのと、自分が飽きるまでやって「もういいや」と自分で理解してやめるのでは、全く価値が違ってきます。多少、その日の夕飯の時間が遅くなろうが、その日の寝る時間が少し遅くなろうが、子どもが納得するまで観察し続け、その子が何かを感じ取ることを考えると、その少しの親の「待つ覚悟」は、子どもにかけがえのない瞬間を与えるかもしれません。そんな意識で子どもの生活を見ると、原体験はそこかしこにあるのではないのでしょうか。

